慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	慶應義塾図書館蔵『人あなさうし』解題・翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Tohru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1997
Jtitle	三田國文 No.26 (1997. 9) ,p.31- 44
JaLC DOI	10.14991/002.19970900-0031
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19970900-0031

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾図書館蔵『人あなさうし』解題・翻刻

石川　透

解題

ここに紹介する慶應義塾図書館蔵『人あなさうし』は、室町物語『富士の人穴草子』の一伝本である。『富士の人穴草子』は、非常に多くの伝本が存在する作品として著名であるが、室町期にさかのぼる古写本は、これまでのところ報告されていない。ここに紹介する『人あなさうし』は、奥書はないものの、室町後期に写されたと思われる。本文的には、江戸初期書写の古態の系統に属しているが、独自な面もある。なお、本書については、『三田評論』一九九七年六月号に簡単に紹介した。

本書の書誌は、以下の通りである。

所蔵、慶應義塾図書館蔵
形態、袋綴、一冊
時代、〔室町後期〕写
寸法、縦二六・八糎、横二一・二糎
表紙、本文共紙表紙
外題、表紙左上打付書「人あなさうし」
内題、ナシ
料紙、楮紙
行数、十行
字高、二三・五糎
丁数、墨付四一丁
奥書、ナシ
印記、「尼ケ崎　塩万　北之口」「岡田真之蔵書」

翻刻に際して、本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、私に句点・読点・「　」・『　』括弧等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかったが、煩瑣になるので（ママ）は記さなかった。また、破損による欠字は□で示した。

（いしかわ　とおる）

人あなさうし

そも〳〵、正ち三年う月三日の事なるに、よりいゑのかうのどの、わだのへいだたねながをめして、「いかに、へいだ、うけたまはれ。あはれ、をとにきゝし、ふぢの人あなといへども、

みることなし。しかるに、すなはち、いかなるふしぎかある。いりて、さがしてまいれ」とありければ、へいだ、かしこまつて、申あぐるやう、「『そらをかけるつばさ、ちをはしるけだものをとりてまいれ』との御事にて候はゝ、やすきほどの御事にて御ざ候へとも、これは、いかゝ候はんとあんじける。しかれども、御ぢやうをそむき申せば、てんのおそれあり。ふたつなきいのちを、きみにたてまつる」と申て、御まへをまかりたち、わだのよしもりのまへにまいり、申けるは、「たねながこそ、きみのおほせをかうふりて候」と申。

よしもり、これをきゝ、「そも、なに事やや」とありければ、へいだ、申けるは、「『ふぢの人あなをさがしてまいれ』との御ぢやうをかうふりて候あひだ、人あなにこそいり候へ。なか〳〵、二たびまかりかへり候ことは、ふぢやうに候。しやばのなごりもいまばかり、ぎよくとのげんざむもこれまでなり」とて、なみだをながし申けり。

よしもり、これをきゝ、「おなじをいと申ながら、御へんをば、よしもりがひざのうへにてそだて、これば、しなばいつしよとおもへども、わたくしならねばちからなし。かまひて、かうみやうをきはめ、さふらひのいゑのなを、うしなひたまふな」とのたまひて、なみだをながされけり。

へいだも、なみだぐみて、たちけるところに、いとこのあさいなの三郎よしひで、これをみて、わつばに、あくはばうといふごんていをちかづけて、四しやく五すんのてうまるとうを、あさいな、てぐるまにのせて、「ふかくなり。わとの、につほんごく、らうだう、さふらひどものみるまへにて、なきづらをしたることこそ、ひがことなれ。なか〳〵、かかるもの、一もんのうちにをきては、それにつれて、みなおくびやうになるべし。それほどおくびやうなるべくは、なんぢがくびをうつてすてん」といかりけり。

へいだ、これをきひて、むねんにおもひ、「おくびやうむしやの、たちかへるといふことなし。されば、われらがなかに、ふかくなる人々候はず。あまりなせめたまひそ。りうたつふちのそこ、とらふすのべゑなりとも、いちど二どは、いらんとおもふぞ。いとま申て、あさいな」とて、いでければ、あさいな、これをきゝ、うちみていひけるやうは、「はしるむまにもむちをうつ也。一しほ二しほのくれなゐも、そむるによつていろをますなり。よしひで、あとをみつけばやとおもへども、一人にさゝれ申てあれば、ちからおよばず。われらがなをもあげてかへれ」とのたまひて、いとまごひはこれまてなり。

へいだ、その日のしやうぞくには、はだにはしろきかたびらの、はきふかくときたるに、あわせひとかさねき、かすみいろのひたゝれに、たもとをむすんでかたにかけ、ゑぼしかけをつよくむすびて、ゝうくゝりをしめて、しろかねにてだうがねしたるかたな、だみたるあふきさしそへて、しやくどうづくりのねりつばのたち、ふたふり、かさねてはきけり。たいまつ十五たいもたせ、六人つれて、きみに御いとま申、しよこくのさふらひたちに、いとまごひして申けるは、「七日と申にあがり候べし。それすぎ候はゝ、しゝたるとおぼしめし候へ」と申て、いはやへぞいりける。

さて、しよこくの人々、これをみて、ゆみとりのならひほど、

あはれなるものはなし。たねながゞこゝろのうち、おもひやられてあはれなり。

さるほどに、へいだは、いはやのうち、一ちやうばかりゆきてみれば、くちには、しゆをさしたることくなるくちなわ、すのこをかきたることくなり。いふせきことかぎりなし。されども、しゆうめいなればちからなく、とびこへ〳〵、五ちやうばかりゆきければ、なまぐさきかぜふく。おそろしきことかぎりなし。

又、かたはらをみれば、十七八ばかりなる上らうの、十二ひとへをかさねて、くれなゐのはかまをき、三十二さうをぐそくし、じつばらとをのゆびまでも、るりをのべたるごとくなり。かんざしはせみのはをならべ、しろかねのはた、こがねのひをもつて、はたをおりてましますが、かりやうびんがのみこゑにて、「いかなるものなれば、わがすかたをみてあるぞ」とのたまへば、へいだ、かしこまつて申あぐるやう、「かまくらどのゝ御つかひに、みうらの一ぞくに、わだのへいだたねながと申ものにて候」と申ければ、ねうばう、これをきこしめし、「なにものゝつかいにてもあれ、まつたく、みづからがまへをばとをすましいぞ。をしてとをる物ならば、いのちをとるべし。これよりかへれ。かへらずしてみづからをうらむな」との給ひければ、へいだ、おそろしさのあまりに、「さらば、これよりかへり申さん」とて、御いとま申てかへりけるところに、ねうばう、のたまひけるやうは、「につぽんごくをもちたればとて、しゝてののちはなにかせん。御身はつかひにてあれども、みづからをみたるまゝ、なんじは、ことし十八さいになるとおぼへたり。三十一といはんはるのころ、しなのゝくにのぢうにんに、こいづみのこ次郎、みなもとのちかひらに、かたらはれ、ゆへなきむほんをおこして、からめとられ、おうしうにながされ、ゆきがたしらぬのべにて、きらるべし。はや〳〵かへれ」とおほせられければ、へいだ、これをうけたまはり、こゝろほそくおもひ、「かへり申」とて、その日のさるのこくに、いはやをいでにけり。

さて、かうのどのにまいり、ふしぎとも、いち〳〵申あげゝれば、かうのどの、いはやのおくをみぬ事を、こゝろにかけたまひ、しよこくへ御ふれありけるやうは、「たれにても、しよりやうほしきものは、ふぢの人あなをさがしてまいれ。四百ちやうの御はんあらん」とありければ、しよこくのさふらひたち、さんだんなしける。「いのちかありてこそ、しよりやうもほしけれ、しゝてののちは、しよりやうなにかせんとていらん」と申なり。

かゝりけるところに、いつのくにのぢうにんに、につたの四郎たゞつなと申人、かまたりのだいじんには三十だい、つゝみの大なごんには十二だい、につたのごんのかみのちやくしたゞつな、しむぢうにおもふやう、「わがしよりやうは、一千六百ちやうもちたり。いま四百ちやうをたまはつて、二千ちやうになし、まつはう、おくはうに、千ぢやうづゞもたせみばや」と思ひて、御ぜんにまいり申やう、「御しよりやうを給り候へ。ふぢの人あなをさがしてまいらん」と申ければ、かまくらどの、きこしめし、「しよさふらひおほしといへども、おもひたちたるものなきに、きどくなり」とて、やがて、御はんをくだされ

けり。

たゞつな、せきまるだうといふものをでいにめし、「いかに、なんぢ、うけたまはれ。たゞつながはてゝのしよりやうは、千ぢやうづゝ、わらんべどもにもたせん」とありければ、ねうばう申やう、「まつ、すぎをうゆるも、しそんをおもふゆへなり。いかに、しよこくのさふらひたち、たゞつなをにくしとやおぼすらん。ちからおよばす、一人にさゝれてあるあひだ、はてざらんよりほかは、よつかいをはなるべきか」とて、につた、その日のしやうぞくには、はだにはしろきかたびら、せいかうのおほくちに、かちんのひたゝれのたもとをむすんで、かたにかけ、ゑぼしかけをつよくしめて、さうのくゝりをつよくゆいて、まうふさがさくのたちをはき、しろかねのさやまき、くれなゐのあふぎさしそへて、こんどは、かまくらどのより、御ぶぎやうをたまはる。ぶぎやうには、いたう、うさみの四郎すけもり、りやうにんあいそへて、たいまつ十五たいもたせけり。「七日と申さんむまのこくに、まかりかへり候べし。それすぎ候はゝ、いはやのうちにてしゝたると、おぼしめし候へ」と申て、につたは、いはやのうちへぞいりにけり。

さて、五ちやうばかり、ゆきてみれどもなにもなし。又、八てうばかり、ゆきてみれども、まして、けだもの、きじんにもあはず。やう〳〵これをゆきすぎて、はいたるたちをぬいて、四はうを、うちはらひ、みれども、なにもなし。又、三ぢやうばかりゆきてみれば、につぽんごくのごとく、月日ほし、あらはれたまふ。まつはらのあるところをみれば、しやうわうしやくびやつこくなる、せり〳〵がわながれたり。たゝいま、人のわたりたると見えて、うらなしをはきすてたり。これをこえてみれば、のきよりをつるみつのをとは、ちゝしよう〳〵と、おちさへづり、まつのうへよりおつるつゆは、しやうほうらくと、びわをひくにたり。ふくかぜのおとは、ひちりき、又、よこぶゑのねにことならず。かゝるひゞきをきくときは、しやうじのねふりもさめぬべし。

さて、おくへいりてみれば、るりのたまをつらねたり。よるひるのしやべちもなし。れんげのひらくをもつて、ひるとしる。しほるをもつて、よるといふ。又、かたはらをみれば、たゝいま、人のひきなれたるとおぼへて、るりのことをたてられたり。一めんのことは、あるじをうらみてかべにたてり。てん上をば、あかぢのにしきをもつてはり、はしらをば、あをぢのにしきをもつて、つゝまれたり。のきには、きんぎんのすだれをかけたり。ともにともがあたつて、れい〳〵といふひゞきは、ぎおんしやうじやのかねのこゑにもことならず。

につた、これをみて、「おもしろや。ごくらくじやうどもかくやらん」。さて、にしのはうをみてあれば、こずゑえたをたれ、ぢにはさくらばなをまじゑたり。きたのはうをみれは、いけあり。いけのなかには、しまあり。しまのうへに、ゑんぶだんごんといふ、こがねのひかりの御しよあり。又、いけにかけたるはしをみれば、八十九けんにかけられたり。はしのまごとに、こがねのすゝをかけたり。一ばんのすゝは、めうほうれんげきやうと、さへづりはじめければ、のこりのすゝも、こゑをそろへて、ほけきやう一ぶ八くはんを、一じもおとさずさへつりける。さて、八十九にあたるすゝは、なむたもん、ぢこく、

ざうちやう、くはうもくとさへづり、このきやうのくりきによつて、九ほんのじやうどへ、むかへとらせたまへと、いのる。ねがひのくどくをもつて、あまねく、いつさいのしゆじやうと、われらと、みなともに、ぶつだうならんとさへづりけり。いけのなかに、せんよのれんげ、はちようのれんげ、あらはれて、みづのいろは五しきなり。

　につた、これをみて、きたい、ふしぎにおもしろやとおもひ、ちかき御しよのうちに、いりてみれば、ひがしには、こがねをのべてしかれたり。又、にしには、しろかねをのべてしきたり。又、きたには、るりをのべてしかれたり。さて、御しよのうちへ、たちいりてみれば、うちより、かれうびんがのみこゑにて、「なにものなれば、わがすむところへきたるぞや」と、いでたまへる御すかたをみれば、くちには、しゆをさしたるごとくなる、どくじや、そのたけ、二十でうばかりなり。つのは十六、まなこは百八にあらはれ、ふくいきは、百でうばかりにたちのぼり、ほむらのごとくもゑにけり。くれなゐのごとくなる、御したをふりたまへば、みのけもいよたち、おそろしきことかぎりなし。

「いかに、につた、われをば、いかなるものとかおもふらん。ふぢのせんげんとは、わがことなり。なむぢをいれて、みづからがすがたをみすること、よりいゑがうんのきはめなり。いかに、につた、うけたまはれ。みづからが六こんには、よる三ど、ひる三ど、もへこがるゝなり。なんぢがもちたるつるぎを、みづからにゑさせよ。六こんにおさめん」とおほせありければ、につた、「うけたまはり候」とて、四しやく五すんのたちをぬいて、大ぼさつにたてまつる。すなはち、さかさまにのみたまふ。「おなじくは、そのかたなをもまいらせよ」とありければ、「かしこまつて候」と申て、しろかねにてだうがねしたる、あかざやのつかをぬいて、みばかりたてまつりければ、おなじくおさめたまひ、「うれしきものかな。此けんをおさめて、五すいの三ねつのくをやすめ、しやうじのねふりもさめにけり。かゝるつるぎのよろこびに、いで、六だうをみせん」とて、どくじやのすかたをひきかへて、十七八のちごにへんじ給ひて、「まことや、につぽんごくのもの、ごくらくぢごくといへども、見る事なしときくときは、みせてかへさん」と、につたを、ひだりのわきにはさみたまひて、六だうへぞ、おもむかせたまひける。

　まづ、さいのかわらをみせんとおぼしめし、かわらにつかせたまひて、おほせられけるやうは、「につた、うけたまはれ。ぢごくのぶぎやうは、まづ一ばんに、はこねのごんげん、二ばんに、いづのごんげん、三ばんに、はくさんごんげん、四ばんに、みづからなり。五ばんに、みしまのごんげん、六ばんに、ゑつちうたてやまのごんげん。されば、一百三十六ぢごくのぶぎやうは、この六人なり。おなじく、くはんをんのすいしやくなり。みぎ六人のぶぎやうしゆにそむきては、かなふまじきなり」。

　さて、さいのかわらをみせたまふ。七つ八つばかりの子ども、二つ三つのおさなきもの、がうじやかぎりもなく、かわらになみゐて、「ちゝよ、はゝよ」とよばはりて、手にてをとりくみて、なげきかなしむこと、いくせんまんともかずしらず。につた、申あぐるやう、「あれはいかなるものにて候」と申せば、

大ぼさつ、きこしめし、「あれこそ、しやばにて、おやのたいないに、十月があひだ、くるしみをかけ、そのをんをおくらずして、むなしくなりたるもの、かわらにつゝきいて、あのくをうくること、五十ざいなり。このほか、うくるくをみよ」とありければ、につた、うけたまはり、しばらくたちやすらひ、みれば、きたより、ひのほむらもゑいでゝ、いしもかわらも、ほのをとなつて、やけにけり。みな、しらほねとなつて、うせにけり。さて、しばらくあつて、おにどもあつまり、くろがねのてつでうをもつて、「くわつ〳〵」といひて、ぢをうてば、又、もとのごとくによみがへりて、くをうくるなり。

にしをみれば、四てのやまとてあり。このふもとに、三づ大があり。そこへは、一まんゆじゆんなり。むかひのはたに、うばおはします。ざいにんのいしやうをはぎとり、びらんじゆといふ木に、かけたまふ。このうばと申は、大にちによらいのけしんなり。かのかわをわたり、しでのやまにつかせたまひ、「いかに、につた、これこそ、しやばへきこへたる、しでのやまなり」。又、しやばせかいにとふらひをなせば、はかもりのたましゐきたつて、やまみちをへたて、あとにあるたましゐによばはりける。「けふ、しやばにて、きにちをとふらひ候と、しやくそんに申て、八十おつかうのつみをめつせよ」と、よばはりければ、たましゐ、うけとつて、たいしやくに申て、ぜんのふだにしるさせたまひて、そのとがをゆるされ申なり。

又、あるざいにんに、おもきいしをつけて、おにどもが、くろかねのいはを、「のぼれ〳〵」とせむるもの、いくせんまんともかずしらす、みち〳〵たり。大ぼさつ、おほせられけるやうは、「これこそ、しやばにありしとき、むま、うしにおもきにをつけて、いきをつがせず、あらくつかいたるものなり。すなはち、うし、うまがあほうらせつとなり、かやうにせむること、一まん八千ざいなり」。

又、あれをみれば、つるぎのやまとてあり。おにともか、しやくのつるぎに、ざい人をさしつなぬきて、せむるところもあり。又、つるぎの山に「のぼれ〳〵」と、てつでうをもつてせむれは、あしてはきれてちりけるを、物によく〳〵たとふれば、ちしほにそむるくれなゐにことならず。これは、しやばにありしとき、おやのめいをそむき、ところ〳〵にすまゐして、一せのあひだ、おやに、こひしや〳〵とおもはれたるもの、このくをうくること、一まんがうなり。

又、にしをみれば、ひのなみ、みづのなみ、やまのごとくたつなかへ、ざい人をつかんで、なけいれけるところもあり。又、ざい人をとつて、くろがねのまるかしをのませて、三百六十のほねつがひに、八万四千のけのあなごとに、くぎをうたれて、おめきさけぶところもあり。につた、「これは、いかなるものにて候」と申せば、大ぼさつ、きこしめし、「あれこそ、しやばにて、けんどんこゝろをもちたるもの、このくをうくること、三まんがうなり」。

又、ひがしをみれば、六つのみちあり。そのつじに、しゆつけ、ころもをちやくし、一人おはします。ざい人どもあつまり、「ほとけ、われをたすけたまへ」と、かなしめども、しやばにてねんぶつをも申さず、ぶつじんにまいることもなければ、ほとけは、ぢひにておはしませども、ちからなく、あはうらせつ

がてにわたし、はやくむけんにおとさるゝ。

につた、「あれは、いかなる物にて候」と申せば、大ぼさつ、きこしめし、「あのしゆけこそ、六だうののうけ、ぢざうぼさつなり。ざい人は、しやばせかいにて、めうりをかんがへ、そのほかまでにて、ぢざうのみやうがうを、となふることもなきゆへに、いま、ぢごくにおつるとき、『たすけたまへ』となげき申せども、かなはず、かやうのくをうくるなり。しやばにて、すこしも、ぢざうぼさつのみやうがうを、となふるものは、たちまち、たすけたまふなり。しやばにかへりて、あかつきごとに、『なむぢざうぼさつ』ととなへよ。しよじんにも、これをふれよ」とおほせられける。

さて、につた、申あぐるやうは、「六だうと申候は、なに〳〵にて御ざ候ぞ」と申せば、大ぼさつ、きこしめし、「まづ一ばんにぢごくだう、二ばんにがきだう、三ばんにちくしやうだう、四ばんにしゆらだう、五ばんにんだう、六ばんにてんだうとて、六だうなり。さらば、ぢごくだうをみせん」とて、「あれをみよ」とのたまへば、どくじや、三すじよりやひて、なかはをつと、みぎひだりはおんななり。ふくいきは、百ぢやうばかりにたちのぼり、みぎひだりのおんな、をとこを、まとひせむることこそあはれなれ。大ぼさつ、おほせられけるは、「につた、うけたまはれ。これこそ、しやばにて、ふたみちかけて、二人のおんなに、むねをこがさせたるもの、このくをうくること、一千三百ざいなり」。

又、あるざい人を、とつておさへて、したをぬきいだして、くぎをうたれ、又、めをぬかるるものあり。くろがねのからすきたつて、なづきをつゝきとをし、しゝむらをば、くろがねのいぬが、くいちらせば、おめきさけぶこと、かぎりなし。大ぼさつ、のたまひけるは、「これこそ、しやばにて、ししやう、おやに、あつかうしたるものなり。このくをうくる事、二千ざいなり」。

又、これをみれば、めをぬかるゝものあり。「これは、おやのまくらをこゑたるとがなり」。

又、まわり八すん、ながさ三ずんのくぎを、くろがねのつちにて、だうなかに、うたるゝものあり。又、ざい人を、とつておさへて、三じやくののこぎりにて、またをひきわらるゝおんなあり。「これは、しやばにて、おとこ一人もちながら、たのをとこに、かげをふませたるおんな、このくをうくる事、四まん五千がうなり」。

又、あるねうばう、十二ひとへをかさねて、うへにたちて、もゝのしゝむらを、ひきさき〳〵、ほねばかりになつてゐる。「これは、しやばにて、けいせひをたて、しよ人をむさぶり、みをすぎたるもの、かくのごとく、くをうくる」。

又、かしらを、だうたいへうちこまるゝものあり。「これは、しやばにありしとき、おとこに、よくおもわれんとて、なきかたちをたしなみ、めうりをこのみ、ぜんごんにはかたむかぬおんな、このくをうくること、五十おつかうなり」。

又、ゆきすぎてみれば、くろがねのつなを、三すじつけて、ひきはられてきたるあまあり。「これは、かうづけのくに、あかまがしよに、うずいのあまとてありしが、人の、よきことはなけき、又、そんをすることをみては、おもひのほかよろこぶ

こと、かぎりなし。しかれば、ふつきのいゑにむまれて、けんぞくをもつこと、三百よにんあり。このけんぞくに、一すんのひまをとらせず、又、しゆけの一人も、くやうすることなし。三ぼうに、けちゑんをむすぶ事もなければ、なか〳〵、ぢうわうのさんだんにもおよばす、すぐに、むけんにをつるなり。につた、うけたまはれ。たゝ、むけんへは、おんなならではおちす。たゝ、おんなのおもふ事は、みな、あくがうよりほかはおもはず。そのゆへに、ふくちうのむしの、なくなみだつもりて、月に一どのさはりとなる。されば、そのあひだ、おとこのむしろに、ねぬことなり。一ねんにつもりて、八十四日いまるゝなり。かゝるとがをしらずして、ぜんごんにかたふくこともなくて、ぢごくにおつることこそ、むざんなれ」。

又、ざい人に、くろがねのつなを、二十すぢつけて、おにどもあつまり、ひきはつて、しもつをもつてうつ。「これは、しやばにて、わがしよりやうにてもなきをとり、ほんのぢたうをのけ、たみをねだり、くはりやうをいひかけ、おもきなやみをいひまとはりたるもの、むねにくぎをうたれ、ふくいきは、百ぢやうばかりにたちのほり、大むけんへおとさるゝなり」。

又、きたをみれば、くろがねのやまあり。いろくろきにうだう、いくせんまんともかずしらず、みち〳〵たり。そらには、くろがねのあみをはり、あほうらせつども、くろがねのいぬをあひぐし、このにうだうどもを、しゝ、とりをいるごとく、おいまはし、いふせ、きりふせ、くろちをながし、さん〳〵にかしやくせらるゝものあり。「これは、しやばにて、物つくることをば、いかにもきらひて、こつぢきをして、しよ人をむさふり、よをわたりしもの、かやうのくをうくること、五百おつかうなり。につた、うけたまはれ。でんばくをつくり、ねんぐをさたし、あまるところをもつて、いつしんをはごくみ、むゑんのものにかへりみ、さんぼう、そうをくやうしたてまつれば、くどくむりやうなり」。

又、こゝに、ひのくるまにのりて、「あら、くちおしや」といひて、くろがねのしもつをもつて、あてられ、四十ねんがあひだ、さかさまにをとされ、いしの大らうにこめられて、しやばにて、とふらふといへども、ながくうかむことなし。「これは、とうたうみのくに、みこのみやの、ねぎにてありけるが、しんでんをちぎやうし、さいしをはごくみ、かみのまつりをばせず、もちろん、かぐらをもまいらせさるによつて、はちまんぢごくにおつるなり。いかに、につた、しやばにかへり、しよ人にかたりつたへよ。人のすまじきものは、ねぎ、かんぬしなり。あがり物をおさめて、ともにくいたる物も、ねぎとつれて、ぢごくにをとさるゝなり」。

又、したを二十ひろばかりにぬきいだして、くぎをうたるゝおんなあり。「これは、しやばにて、『ぢごくおそろしき』とて、『ふたゝびかへりたる物なし』といひたるとがにより、あのくをうくること、五まんがうなり。又、『ぢごくおそろしき』とて、『かへりたるものなき』といふものの、まへにゐ、きゝたるものも、大むけんにをとさるゝなり」。

又、こゝに、おんなあり。「これは、しやばにて、とがもなきげ人を、とがあるよし、おとこにいひきかせ、てうちやくさせたるおんな、いろくのくを、七千がううくるなり」。

又、こゝに、たけ七しやくはかりなるはうしを、とつておさへて、くろがねのたつのくちにいれて、一日に、三升三合のあぶらをしぼらるゝ。「これは、きやうろんしよきやうをば、よそにみて、もんじ一じしらずして、あまさへ、ふばうをおこし、たにんをみてはそしり、しりやうをばとふらはず、ほとけに、かう、はなをとることもなく、ぶつじんにまいる事もなきもの、あのくをうくること、九千がうなり」。

又、はうし、ころもをこしにつけ、ぢごくのかまのまはりを、はしりめくるが、あゆみはづして、はまりけるが、されども、ぢごくのそこへはおちず。「これは、しやばにて、ぶつばうには、いりたれとも、うみのうをの、しほにそまぬがことくにて、人めばかりにて、ごしやうをば、ねがうよしにみえて、ないしんには、なにともおもはぬもの、あのくをうくること、十がうなり」。

又、こしよりしたを、ちしほにそめたる、くれなゐのごとくにして、こしのほねには、くぎをうたれ、はらは、大かいのことくにして、あほうらせつに、つるぎをもつて、まへをさかるゝおんなあり。「これ、おとこに、よくおもはれんとて、たいないの子をおろして、あらいすてたるもの、あのくをうくること、一まん三千がうなり」。

さて、これをゆきすぎてみれば、上らうとおぼしき人と、げ人とみゑたるものに、くろがねのくびかせを、二十すぢかけて、むけんぢごくに、おとさるゝものあり。「これは、しやばにて、みをうり、しろきかみに、くろきもじをするゑたりしが、しうめいをそむき、にげうせたるもの、かゝるくをうくること、八せんざいなり」。

又、そらをみれば、かざりて、うつくしきねうばう、やうらくをさげ、たまのこしにのりて、五しきのはたをさしかけ、だいひのかぜになびかせて、あのくたら三みやく三ぼだいのほとけたちを、あいぐして、十二のぼさつは、そらにぎがくをなし、くはんをんせいし、れんだいをかたふけ、九ほんのじやうどへまいりたまふ、こしのうちより、ひかりをはなちたまふねうばうあり。「これは、ひたちのくに、きただのせうにある人なり。この人は、ふつきのいゑにむまれ、ぢひをもつばらとし、うへたるものには、ぢきをあたへ、さむけなるものには、いしやうをとらせ、月に六どのひまをいだし、ぎやくしゆのときをし、ねんぶつを申、三ぼうをくやうし、かまどせんぎやうをひき、ひんなるものをばはごくみ、ぢきびやうどうなるがゆへにより、かくのごとく、たちまち、ほとけになる。につた、うけたまはれ。たゝ、かまどせんぎやうに、すぐれたるくどくはなし。しやばにかへり、しよ人にこれをふれよ」。

又、くろがねのあみを百ぢやうにはり、そのなかに、ざい人をとりいれて、くろがねのつなにとりつきて、はなつこともなし。又、くろがねのつなにてをかけて、くちをひらき、「あら、くちおしや。われをたすけたまへ」と、なきさけべとも、百ぢやうのほのをにむせてかなはず。「これは、しやばにて、物にわなをかけたるもの、一ときも、此ほのおにしめすことなく、此くをうくること、五十まん七千がうなり」。

又、にうだうを、さかさまになして、しゝむらをきりとらるゝものあり。「これは、人めばかりをはぢ、ないしんには、ほと

けにもおそれうやまはず、きやうだらにをもよまず、ねんぶつをも申さず、かう、はなをもまいらせず、このとがにより、あのくをうくること、五千がうなり」。

又、おに百人して、もちたるいしをもつて、ざい人のむねにをしかけて、おすところもあり。「これわ、しやばにて、とりの子をこのみ、くいたるもの、あのくをうくる事、一千ざいなり」。

又、こゝに、りやうがんに、くきをうたれて、おめきさけぶもの、かずしらずあり。「これは、しやばにありしとき、人をぬき、ふたますをつかいたるもの、あのくをうくること、五百ざいなり。いかに、につた、うけたまはれ。一だいきやうしゆしやくそんの、あそばしたるきやうを、みしりたるものは、ぶつざいしよにちかづくなり。されば、一ぢもしりたる人をそしれば、大むけんにおつるなり。又、一ぢをもしらざるは、もうもくにあひをとらず。それによつて、じやうやのやみにまよふなり。又、あさ日に、おんなのまへをあつること、むけんのがうなり」。

又、こゝをみれば、いしやうをもちながら、ぐれん大ぐれんの、こほりにみをいれ、かんにつめられて、おめきさけぶものあり。「これは、しやばにて、さんぞく、かいぞくをして、人のいのちをたち、いしやうをはぎとり、又、人のさむきことを、しらずしてゆきしもの、ふるにもせめつかひたるもの、かくのごとくなり。いしやうをきんとすれば、ひのほむらとなりてもへければ、きることもかなわず、かんにつめられ、かなしむこと、三百五十ざいなり」。

又、こゝに、あまごせのあり。こしのほねには、くぎをうたれ、はらは、四大かいの□□て、めはなより、くろちをながして、こくじやうぢごくにをとさるゝ。「これは、しやばにて、ゑいぐわのさかりにあまになり、ねたや、くやしや、あまになるまじき物をと、ねたみ、くやみ、かみさげたらば、おとこに、そでたもとをひかるべきに、かみそりたることのはらたちや、人のかみさげて、おとこに、そでをひかるゝをみて、さても〳〵、むかしこひしきものかなと、ふくかぜ、たつなみにつけても、おもふあくがうにより、六年六月のあひだ、さかさまに、大むけんにおつるなり」。

又、しやばにて、こゝろおほくもちたるおんな、くろがねのくびかせをかけられて、百ぢやうのいしをひかせられて、おめきさけぶものあり。「これは、しやばにて、おとこをおほくこのみしゆへに、あのくをうくること、二百五十ざいなり」。

又、ほむらのなかに、あまおんな、おほくいり、なきさけぶものあり。「これは、しやばにて、くいものどきに、ひとのきたるを、いふせくおもひ、かほをあかめて、はらをたてたるとがにより、四十二万がう、あのくをうくるなり」。

又、によ人の、かみさきより、みやうくわもゑいで、かみをてにくりまきて、ひたいにくぎをうたるゝものあり。「これは、しやばにて、かみやほとけにまいらするものをば、いかにもおしくおもひ、わがかたちをこしらゆることを、ほんとしたるとがにより、あのくをうくること、九千ざいなり」。

又、子のなきものゝ、とがのふかきことは、たゝ一人うみて、又むまさるは、むけんのがうなり。又、からおんなとて、月に

一どのさわりのなきによ人も、又、たとひ、ふつきのいゑにむまれて、七まんぼうを、つみかさねおきぬれども、いのちのあるほどこそ、わがもちしかぎりあつて、いのちつきなば、たからは、たゝ、かわらのいしのごとく、たゝ、あきの木のは、はるのゆめのことく。されば、子なき人は、いのちのうちに、ごしやうを、いち大ぢにかけて、ぜんごんをおもひて、ぎやくしゆをすべきなり。

又、あれをみれば、ざい人をとつて、さかさまにひきはつて、一ぢやうのいしに、てをとりつかするものあり。「これは、しやばにて、おやにても子にてもなき人の、おんをかうふり、そのをんをおくらずして、むなしくなりたるもの、かくのごとくなり」。

又、あるざい人の、あしてを、のこぎりにて、ひききらるゝ物あり。「これは、しやばにて、やうにもなき木を、きりすてたるもの、あのくをうくるなり」。

さて、大ぼさつ、おほせられけるやうは、「これより、がきだうをみせん。これをみよ」とのたまひける。すなはち、こゝに、ざい人あるをみれば、はらは大かい、くびはいと、かしらはしゆみせんのごとくなり。いひはまへにあれども、くはんとすれば、くはゑんとなつて、もへければ、くうこともかなはず、よるもひるも、ほしやくいたやと、おもふばかりにて、すぎにけり。「これは、しやばにて、ざいほうをもちながら、われもつかはず、まして、人のやうにもたてず、ぜんごんをじゆすることもなくして、おしや〳〵と、おもふばかりにて、われも、ほしさをこらゑて、しゝたるもの、あのくをうくること、五十まん一千ざいなり。されば、ありなから、おしむべからす。いしやうをも、たしなみ、すみどころをも、さはやかにすべきなり。しやばは、たゝ、ゆめまぼろしのよなり。さきのしやうにて、ぜんごんをせざるによつて、いま、ひんにむまれて、なにごともかなはずして、うとくなる人をみては、うらやみ、みるものごとを、ほしや〳〵とおもふは、みな、このよのがきなり。されば、ぜんごんをすれば、あくちへはおちず」。

又、こゝをみれば、子をうみて、きりさき、くろうものあり。「これは、しやばにて、いとけなき子をうりて、みをすぎたるもの、あのくをうくること、二百五十がうなり」。

又、米を一くちふくめられ、くろがねのいとにて、くちをぬいふさがれて、ほうにくぎをうたれ、くうことはかなわず、米は、めはなよりわこみいて、ちは、くれなゐを丸かしたるがことくなり。「これは、しやばにて、ある物をなきやうにかたりなし、人のめに、かくしかねて、すぎたるもの、このくをうくること、三千がうなり」。

又、にしをみれば、ある人がいみしくて、三ぼうをかきするゑ、おもひのまゝにもてなし、かしづきする。「これは、しやばにて、わがゆくするゑをおもひ、ごしやうを一だいちにねがひ、ふうふともに、ぜんごんをいたし、かくのごとくなり。これは、みかわのくに、へいだのせうに、ひらかたのにうだう、なをはしやうしんといふなり。九ほんのじやうどまて、このしやうしんときこえける。三ぜのしよぶつは、あつまり、こがねのだうをつくり、たまのすだれをかけ、るりのやうらくをかぜになびかせ、二十五のぼさつは、ぶがくをそろへ、四てんは、はなを

さゝげ、このへいだのにうだう、しやうしんふうふをむかへたまふ。につた、しやばにて、ねんごろにつたへよ。さらば、これより、しゆらだうをみせん」とのたまひて、すなはち、みせたまふ。

ひのほのを、もゆるそのなかゑ、つるぎ、ふりかゝり、ゆみや、みにまとはり、みをつらぬき、たちかたなかまへ、かせんをすること、かぎりなし。みのけもよだち、こゝろもうせぬるばかりなり。さん〳〵にたゝかひ、みよりいづるちをすい、ぢきとす。されば、つるぎのさきにかゝりたるものは、みな、このごとくなり。おんなゝりとも、つねしきはらをたて、がまん、じやまんなるものは、みな、しゆらだうにおち、つるぎにみをふれ、きりやぶるなり。三あくだうをみせて、ひだりのはきに、につたをかいはさみ、ゑんまのちやうにつきたまふ。

さるほどに、ゑんまのちやうをみるに、七里につぢをつき、こがねのもんをたて、そのうちに、ぢうわうのをはしますとおほえて、ごしよをならべて、ひつしとつくりたり。これに、ぢうわうの、一人つゝをはしますとみえたり。まへには、せんをしるせるくしやうしん、又、あくをしるせるくしやうじん、みな、ふてをもつて、きんさつ、てつさつとて、ぜん人をば、きんさつとて、こがねのふだにつけたまふ。又、あく人をば、てつさつとて、くろかねのふだに、つけたまひける。

さて、ざい人ども、くろがねのつなをもつてしばり、ひつしとならべおき、かのふだをとりいたし、「しやはにてのつみとがを、いち〳〵にみよ」と、ひきつけられたり。ざい人、のがるべきやうなけれども、もしや、のかるゝところへて、ちんじ申せば、「さらば、がうのはかりをもつて、かけてみよ」と、かけられたり。これをもあらがい申せば、「じやうばんのかゝみをみせん」と、みせたまへば、そのかゝみに、しやはにてのつみとが、つゆほとものこらす、あらはれたり。ざい人、のかるべきやうなし。ふしまろび、こうべをちにつけて、きなるなみたをながし、五しきのあせをかき、「われをたすけたまへ」と、大おんあげて、なけきかなしむ事、かぎりなし。

をのがつくりしつみのむくゐなれば、そのかひもなく、十わうさんたんあつて、「しやばに子をもち申」と申ものをば、しばらくひかへて、まちたまひける。又、「子もなき」と申ものをば、すぐに、ぢごくにおとしたまふなり。ゑいたいうかむことなく、くろがねのうすにいれて、つきつぶさるゝなり。又、くろがねのみにいれてひれば、さま〳〵によみがへりて、もとのにんたいになり、いろ〳〵のせめをうくるなり。又、ねんぶつのぎやうじやをば、十わうの、御ざをたちたまひて、うやまはせたまひけり。

とふらひ、きやうやうのこと、しよ七日のぢうわう、御まへにて、しやばのついぜんを、まちたまへとも、とふらはず。おにども、まいり申やう、「はやく、ぢごくにおとし申さん」と申せば、十わう、きこしめし、「二七日をまちてみよ」とおほせられ、百か日になりけれども、とふらふ人もなし。又、おにともまいり、「もはや、ぢごくにいれ申べし」と申せば、十わう、「いつしゆきをまちてのことよ」とおほせられければ、ちからなく、おにとも、まかりかへる。さて、かのねんきくをまちけれども、とふらはず。又、だい三年、七ねん、十三年、

三十三ねんまで、まちたまへども、しやばにて、けうやうなさゞるゆへ、つゐに、おにどものてに、御わたしあつて、むけんぢごくにおつるなり。なか〳〵うかむことなし。

又、あるはうしを、おにどもあつまり、なかさしをとつて、くろかねのゆみにてさしはさみ、いふせ、きりふせ、さん〳〵にかしゆくしける。「これは、しやばにて、しらぬはうをしりたるよしにて、そうちしきに、かつかうせられて、せをうけたるもの、このくをうくること、三百ざいなり。されば、御きやうをもしらずは、せもつをもうくへからず。又、はうし、あまといはれて、人かずにはいりたれども、こゝろそまぬもの、めはなにくぎをうたれ、大しやうねつのそこにいること、うたがいなし」。

又、あるによ人の、のどのうへに、つるぎいづる。おんな、くちをさしつらぬくに、さけぶこゑのひまもなし。「これは、しやばにて、おとこ、せんこんをすれは、おんな、さまたげをなし、そのとがにより、五十がうのあひだ、あのくをうくるなり。されば、一人くどくをせば、ともによろこぶこゝろあるべし」。

又、ぜんあくにわたるはし、三つならびてあり。一ばんに、上ぼんへまいるはしとて、こがねにてかけられたり。二ばんに、ちうぼんへまいるはしとて、しろかねにてかけたり。又、げぼんにむまるゝものは、あかゞねのはしをわたるなり。又、くろがねのはしもあり。これは、あく人のわたるはしなり。

さて、「九ほんのじやうどをみよ」と、みせたまひければ、くはうみやうかくやくたり。きんぎんのるりのべ、ねんぶつさんまいのところもあり、せんぼうくやうのところもあり。はやしには、いろ〳〵のこずゑをならべ、はなをまぢゑ、いきやうくんじ、たまをのべたるところもあり。又、はちすのはなの、つぼめるもあり、又、ひらくもあり。五しきのはたを、だいひのかぜになびかせて、二十五のぼさつは、ぶがくをそろへ、あみだは、ひかりをはなちたまへば、くはんをんは、御らいかうしたまへば、さんめうのはな、ふりかゝり、こゝろもことばもおよばず。につた、これをみて、しやうじのねふりもさめぬべし。

「さて、ところ〳〵のありさまを、こと〳〵くのこらず、につたにみするなり。このうへは、しやばへかへさん」と、おほせありて、「さらば、にほんのもの、ぢごく、ごくらくといへども、めにみることなし、といふに、このさうしをもち、ゆきてみせよ」とて、こがねのさうしを、三でうたまはる。「たゞし、なんぢ、いちごのあひだ、もちて、三十三年といはんとき、いづのくにの御やまにて、ひろむし、みづからがありさまを、しやばにて、かたるな。もし、かたる物ならば、なんぢも、たちまちころすべし。又、よりいゑも、たすくべからず。ことに、こがねのさうしも、こゝにかへるべきぞ。そのとき、みづからをうらむな」と、おほせありければ、につた、「かしこまつて候」と申て、きゑつのまゆをひらき、ほどなく、七日と申むまのこくに、いはやをいでにけり。

さて、きみをはじめたてまつり、大みやう小みやう、われも〳〵とまいり、いはやのうちのことをきかんとて、ざゞめきけり。

さて、かうのどの、につたをめし、おほせられけるやうは、「につた、いかなるふしんかある」と、御ぢやうありければ、

につた、「まづ〳〵、しばらく御めんなされ候へ」と申ところに、又、御たづねありければ、御ぢやうにおよばす、人あなのいはれを、いち〳〵、しだいにかたり申せば、ふるなそんじやの御せつぼうに、あいおとらず。「これを、よく〳〵おがみまいらせ候へば、ひとつは、しやうじのねふりもさめぬべし」と、かたりもあへず、につたは、とし四十一にて、むなしくなる。

又、そらに、こゑあつて、よばはりける。「みづからがことを、かたりてあるあひだ、なんぢがいのちを、たゞいま、ぬきとるなり。ことに、よりいゑも、たておくまじき」と、よばはりたまへば、まことに、あらたにこそ、おぼへたり。

さて、くに〳〵の大みやう小みやう、御いとまたまはり、まかりかへりければ、につたがしがひをば、こしにのせて、いづのくにの、につたへこそ、おくりけり。

さるほどに、まつはう、おくはう、きやうだいの人々は、なげきかなしむといへども、そのかいなし。この物がたりをきく人は、ねんぶつ申、ぜんごんをし、ぎやくしゆをし、ごくらくわうじやうの、しゆいんをねがひ申べし。かまひて、こゝろをあしくもつべからず。されば、につたの四郎たゞつなも、こゝろしやうぢきにして、げんざいより、九ほんのじやうどをおがみ、たちまちに、上ぼんれんだいに、いんしやうせしむるなり。又、しやうぢきしよはうべん、むりやうどうと、とかれたり。さら〳〵うたがいあるべからず。ふぢのせんげん大ぼさつの、ありがたきことども、かくのごとくしるす物なり。